

【 復活讃詞 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと
主 女 弟 子 は 復 活 光 音

づれ を てんしより ききうけ て、
天 使 聞 受

げんそよりの ていざいをふる いすて、しと
原 祖 定 罪 振 棄 使 徒

にほこりてい え り、し はほろぼさ
誇 日 死 滅

れ、ハリストスか み は ふくか つして、せかいに
神 復 活 世 界

おおいなる あわれみをたま えり。
大 憐 賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 聖三の歌 】

代禱) 主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
 主 敬 虔 者 救 及 我

らにききたまえ。
 等 聆 給

代禱) 世々に、

アミン。

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 を 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世 に、アミン。

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等 憐

あわれめよ。
 憐

【 提綱 (プロキメン) 主日第4調 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾の工業は何ぞ多^{しわざ}き、^{なん} 皆^{おお}智慧を以て作^{みなちえ}れり、^{もつ} ^{つく}

しゅ よ 、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き 、
 主 爾 工業 何 大
 み な ち え を も っ て つ く れ り 。
 皆 智慧 以 作

誦經) ^{わ たましい}我が ^{しゅ ほ あ}靈よ、主を讃め揚げよ、^{しゅ わ かみ なんぢ いた おおい}主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き 、
 主 爾 工業 何 大
 み な ち え を も っ て つ く れ り 。
 皆 智慧 以 作

誦經) ^{しゅ なんぢ しわざ なん おお}主よ、爾の工業は何ぞ多き、

み な ち え を も っ て つ く れ り 。
 皆 智慧 以 作

【 使徒經 (アポストロス) 103 端 ロマ書 10 章 1 節～10 節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パヴェルが ^{じん たつ}ロマ人に達する ^{しよ よみ}書の讀、

代禱) ^{つつし}謹みて ^き聴くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^わ我が ^{ため}イズライリの爲に ^{こころ}心に ^{ねが}願う ^{ところ}所と ^{かみ}神に ^{いの}禱る ^{ところ}所とは、^{そのすくい う あ}其救を得るに在

り。 ^{けだしわれかれら}蓋 ^{ため}我 ^{しょう}彼等 ^なの爲に ^{かれら}證 ^{かみ}を作す、^お彼等 ^{ねつしん}は神に ^{しか}於ける ^{ちしき}熱心あり、^{したが}然れども ^し知識に ^う循う

に ^{あら}非ず。 ^{けだしかれら}蓋 ^{かみ}彼等 ^ぎは神の ^し義を ^{おのれ}識らず、^ぎ己の ^た義を立てん ^{はか}ことを ^{かみ}圖りて、^ぎ神の ^{ふく}義に ^せ服せざり

き。 ^{けだしりつぼう}蓋 ^{おわり}律法の ^{およそ}終は ^{しん}ハリストス ^{ものぎ}なり、^{いた}凡の ^{りつ}信ずる ^せ者 ^{いた}義とせらるる ^{りつ}を致す。 ^{いた}モイセイは ^{りつ}律

ぼう ^よ法に ^ぎ由る ^さ義を ^{しる}指して ^{これ}録せり、^{おこな}之を ^{ひと}行いし ^{これ}人は ^い之に ^{しか}由りて ^{しん}生きんと。 ^よ然れども ^ぎ信に ^よ由る ^ぎ義は

か ^{いわ}斯く ^{なんぢ}云く、^{こころ}爾の ^い心に ^{なか}言う ^{たれ}勿れ、^{てん}孰か ^{のぼ}天に ^{すなわち}升らん、^{くだ}即 ^{ため}ハリストスを ^{あるい}降さん ^{あり}爲なり、^{あり}或

は ^{たれ}孰か ^{ふち}淵に ^{くだ}下らん、^{すなわち}即 ^しハリストスを ^{のぼ}死より ^{ため}上せん ^{しか}爲なり。 ^{しよ}然るに ^{なに}書は ^い何を ^{ことば}か言う、^{ことば}言

は ^{なんぢ}爾に ^{ちか}近し、^{なんぢ}爾の ^{くち}口に ^あ在り、^{なんぢ}爾の ^{こころ}心に ^あ在りと、^こ是れ ^{すなわち}即 ^{しん}信の ^{ことば}言、^{われら}我等 ^{つた}が ^{つた}傳うる

ところ もの けだしも なんぢ くち しゅ う と なんぢ ころ かみ かれ し ふく
所の者なり。蓋若し爾の口に主イイススを承け認め、爾の心に神が彼を死より復

かつ しん すなわちすく けだしひところ もつ しん ぎ いた
活せしめしことを信ぜば、則救われん。蓋人心を以て信じて義とせらるるを致し、

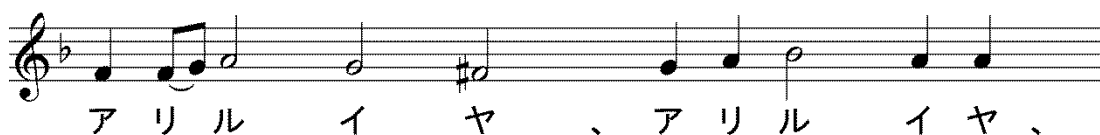
くち もつ う みと すく いた
口を以て承け認めて救わるるを致す。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんとやっているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

代禱) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第4調 】

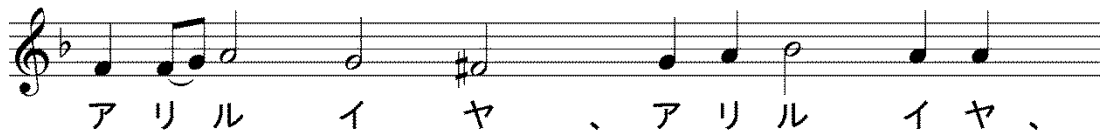


アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

誦經) 神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

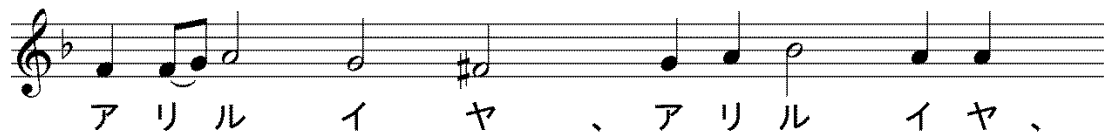


アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

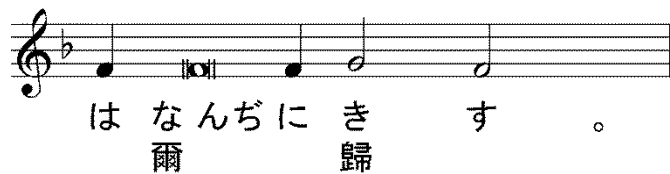
誦經) 爾は義を愛し、不法を惡めり、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 28 端 8 章 28~9 章 1 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) マトフェイ^{でん}傳^{せいふくいんけい}の^{よみ}聖福音經の讀、



代禱) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) 彼の^か時^{とき} イイス、ゲルゲシンの^ち地^{いた}に至^{とき}りし時^{まき}、魔鬼^よに憑^{もの}らるる者^{にん}二人^は 墓^いより出^かでて、彼^かを

迎^{むか}う、甚^{はなはだ} 猛^{だけ}し、人^{ひと}の敢^あて其^{その}路^{みち}を過^すぐるなきに至^{いた}れり。視^みよ、彼^{かれ}等^ら號^さびて曰^いえり、神^{かみ}の

子^こ イイスよ、我^{われ}等^らと 爾^{なんぢ} と何^{なん}ぞ 與^あらん、時^{とき} 未^{いま}だ至^{いた}らざる先^{さき}に、爾^{なんぢ} 我^{われ}等^らを 苦^{くる}めん爲^{ため}

に此^{ここ}に來^{きた}りしか。此^{ここ}より 遙^{はるか}に 豕^{ぶた}の 大^{おお}なる 群^{むれ}は牧^かわれたり。魔鬼^{まき} 彼^{かれ}に 求^{もと}めて曰^いえり、若^も

し我^{われ}等^らを逐^おいださば、豕^{ぶた}の 群^{むれ}に 入^いるを 容^{ゆる}せ。彼^{かれ}は之^{これ}に 謂^いえり、往^ゆけ、魔鬼^{まき} 出^いでて 豕^{ぶた}の 群^{むれ}に

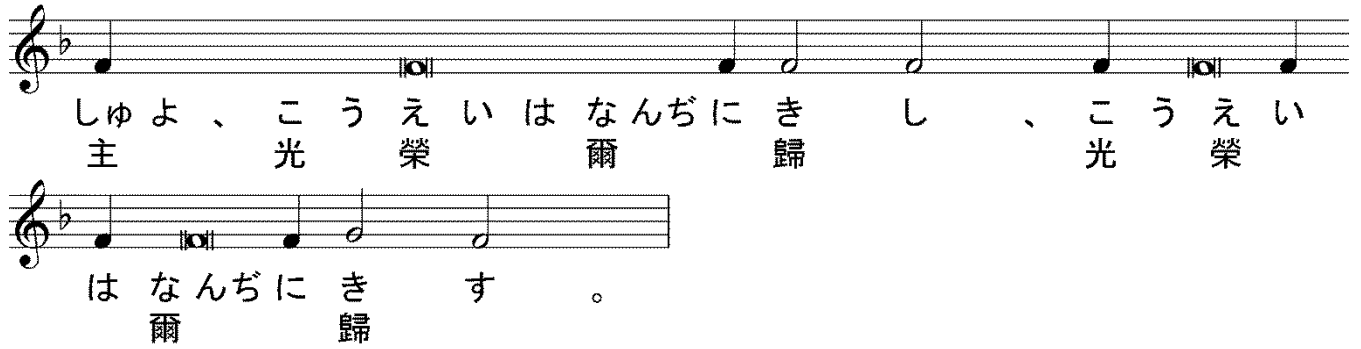
入^いりしに、視^みよ、豕^{ぶた}の 群^{むれ} 悉^{ことごと}く 山^が坡^けより 海^{うみ}に 逸^かけて、水^{みづ}に 溺^{おぼ}れたり。牧^かう者^{もの} 奔^{はし}りて 邑^{まち}に 入^い

り、此^{これ}等^らの 事^{こと}と 魔鬼^{まき} に 憑^よらるる 者^{もの} の 事^{こと} とを 告^つげたるに、視^みよ、邑^{まち} 擧^こりて 出^いでて、イイスを 迎^{むか}

え、彼^{かれ} を 見^みて、其^{その} 境^{さかい} を 離^{はな}れん こと を 請^こえり。彼^{かれ} 舟^{ふね} に 登^{のぼ}り、濟^{わた}りて 己^{おのれ} の 邑^{まち} に 來^{きた}れり。

(比較用 口語訳) イエスはガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか。さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、

がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。



しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんちにきす。
爾 歸

※代式祈祷③ へ